

『更級日記』論

——伝説・夢・物語憧憬の記述から——

田村雪乃

はじめに

『更級日記』は、寛弘五年（一〇〇八）～康平二年（一〇五九）頃までを生きた菅原孝標女によって晩年に回想して書かれた、女流日記文学の一つである。上洛の紀行部分を経て、京に到着してからの物語を耽読する少女期、宮仕えと結婚、物語に勤しむ中年期、夫を亡くし悲しみに暮れる晩年と、十代から五十代に至るまでの生涯が綴られていき、平安朝を生きた、一人の女性の一生を辿ることができるような作品である。

平安期の女流日記文学で代表的なものには、藤原道綱母と夫兼家との夫婦生活が回想される『蜻蛉日記』、和泉式部と敦道親王との恋愛模様が歌物語形式で綴られる『和泉式部日記』、中宮彰子に仕えた紫式部によって、主家の慶事の記録が詳細に描かれる『紫式部日記』などが挙げられ、これらはどれも長保二年（一〇〇〇）前後に成立した作品である。

しかし『更級日記』には、先に挙げた女流日記文学のように、特定の執筆動機が想定できるような大きな出来事は記されておらず、先行研究における主題の捉え方も様々である。『源氏物語』、

物語世界への憧憬や夢幻をテーマと捉えたものから、作者の晩年の宗教的回心を認めるもの^②、夫の死後全てを喪失した晩年において、その原因を過去の自分の態度に求め、悔恨するものと捉える論^③などが展開されている。近年では、悔恨によって否定するものではなく、自己史を愛惜の念で愛しむもの、自己の生涯を見つめ直すものというような論に移り変わってきている^④。

一つの主題がみえにくいこの『更級日記』は、どのような日記文学として読むことができるのだろうか。本稿では、作品中にみられる「伝説の記述」、「夢の記述」、「物語に関わる記述」の三つの観点に基づき、それぞれの記述に加え、それらの作品中の位置についても着目することによって、『更級日記』の特色について考察したい。

本稿ではこの作品を、犬養廉氏による、時系列に沿った五つの章段分け^⑤に拠り、以下の場面分けで論じていく。

① 上洛の記（「あづま路の道のはてよりも、」）（作者十三歳頃）

② 京での生活（「ひろびろとあれたる所の、」）（作者十三歳頃）

③ 宮仕え（「母、尼になりて、」）（作者三十二歳頃）

④ 物語（「今は、昔のよしなし心もくやしかりけりと」）
 「作者三十八歳頃」

⑤ 晩年（「世の中にとにかくに心のみつくすに、」）「作者五十歳頃」

また、これらの場面分けを元に、以下の表中に、各場面での記事の主な内容を順に簡単に挙げ、三つの観点を《伝説↓●、夢↓▲、物語↓■》とし、それらの記述がある位置に記号を入れて示した。

【表】『更級日記』中における伝説、夢、物語の記述の位置

凡例

・「記事の内容」の項目は、五つの場面内の主な出来事を時系列で把握できるよう、アルファベットを用いて示した。

●伝説、▲夢、■物語の記述をそれぞれ記される順に示し丸番号を付した。（②京での生活）の場面⑩（物語耽読）など、一つの場面で三つの観点にまつわる記述が複数みられる場合は、縦に番号を記している。

場面	記事の内容	伝説	夢	物語
①上洛の記 （作者十三歳頃）	①冒頭部 ②上総国 ③下総国 ④武蔵国 ⑤隅田川 ⑥相模国 ⑦足柄山 ⑧駿河国 ⑨富士の山 ⑩富士川 ⑪美濃国 ⑫近江国 ⑬粟津 ⑭京	●① ●② ●③		
②京での生活 （作者十三歳頃）	①京到着 ②継母離別 ③乳母ら死 ④物語耽読 ⑤猫を飼う ⑥猫を焼死 ⑦長恨歌 ⑧父の任官 ⑨清水参詣 ⑩初瀬代参 ⑪西山移住 ⑫京に戻る		▲① ▲② ▲③ ▲④ ▲⑤	■② ■③ ■④ ■⑤ ■⑥ ■⑦ ■⑧ ■⑨

場面	記事の内容	伝説	夢	物語
③宮仕え (作者三十二歳頃)	①母の出家 ②初出仕 ③一時帰宅 ④結婚 ⑤出仕中断 ⑥家事 ⑦再出仕 ⑧源資通との出会い		▲⑥	■⑩
④物語 (作者三十八歳頃)	①物語決意 ②石山寺 ③道中 ④東大寺 ⑤山辺の寺 ⑥長谷寺 ⑦鞍馬 ⑧石山寺 ⑨長谷寺 ⑩広隆寺		▲⑦ ▲⑧ ▲⑨ ▲⑩	■⑫
⑤晩年 (作者五十歳頃)	①述懐 ②持病悪化 ③夫の任官 ④夫の死 ⑤悔恨 ⑥昔の夢 ⑦甥や尼か ⑧らの音信		▲⑪	■⑬

一 上洛記中に描かれる伝説

〔①上洛の記〕の場面では、作者が物語を求めて上総から出発し、京へ上るまで(実際には上総からの帰京である)の約三か月間の紀行文が綴られ、伝説や歌枕などが記される地もある。三つの伝説、「まののてう伝説」「竹芝伝説」「富士川伝説」を取り上げる。

(一) まののてう伝説

「まののてう伝説」は、作者が、昔下総国に住んでいた「まの長者」の家跡付近の川を、舟で渡る場面で記される。

昔、下総の国に、まののてうといふ人住みけり。疋布を千むら万むら織らせ、晒させけるが家の跡とて、深き川を舟にて渡る。昔の門の柱のまだ残りたるとて、大きな柱、川の中に四つ立てり。人々歌詠むを聞きて、心のうちに、

朽ちもせぬこの川柱のこらずは昔のあとをいかで知らまし

この伝説について津本信博氏は、「この更級日記という作品は「まの長者」の四本の柱のように自分の存在をこの世に残す行為であり、孝標女が人生の川に残した門柱なのではないか。」と述べている。日記の初めの方にこの伝説が記されることから、この日記を過ぎ去った自身の人生を残すための跡にする、という作者の意志のように捉えられる。

(二) 竹芝伝説

「竹芝伝説」は、作者一行が下総国を後にし、武蔵国にさしかかった場面で描かれる。武蔵国に入ると、作者らは「たけしばといふ寺」に辿り着く。ここはどのような所か、と作者が尋ねると、その土地の人が以下のような内容の伝説を語り出す。

昔この国で一人の男が、火焚き衛士として宮中に勤めていた。勤めが辛く、故郷にある酒壺に思いを馳せる独り言を呟きながら御殿の前を掃除しているところを、帝の娘が御簾からご覧になっていた。姫君は衛士の話す酒壺に好奇心を抱き、衛士に、自分をそこへ連れて行って酒壺を見せるようにと言う。衛士は姫君を背負って、故郷の武蔵国に下った。都から使者がやってきて姫君を都へ連れ戻そうとするが、姫君は、自分はどうなるべき運命なのだと行って聞かない。事情を聞いた帝は、竹芝の男に武蔵国を預け与え、租税や労役からも解放することにした。衛士は家を内裏のようにして姫君を住まわせたが、姫君が亡くなったので、寺にしたのを竹芝寺という。姫君が産んだ子ども達は武蔵という姓を戴き、その後、火焚き屋には女が詰めるようになったという。

この話は、衛士逃亡譚の類ではないかとされているのが通説である。津本氏は、『大和物語』、『今昔物語集』におけるこの話型の存在を指摘し、多田一臣氏は、『伊勢物語』との話型の類似に言及している。これらの話はどれも、下級男性が都から貴族女性を略奪する、という型がとられている。しかし、『伊勢物語』や『大和物語』の説話が暗い結末となっているのと比較すると、「竹芝伝説」はハッピーエンドとなっている。その点について小谷野純一氏は、前述の説話とは異なり、「竹芝伝説」では皇女が主導

権を握り、自らの意志で都を抜け出している点に着目している。¹⁰ 皇女は、衛士が独り言で呟いた「瓢」に心惹かれ、それを見たい、そこへ連れて行け、と自ら略奪されに行っている。使いが後を追う皇女を都へ連れ戻そうとした際にも、皇女は「われさるべきにやありけむ」、「これも前の世に、この国に跡をたるべき宿世こそありけめ。」と自身の運命を受け入れ、一貫して強い意志をもっている様子が描かれる。

また、西木忠一氏は、「直柄の瓢に魅せられてしまった本伝説の皇女は、実は孝標女の姿でもあった筈である。」と述べている。¹¹ 姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふままに、(中略)「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身を捨てて額をつき祈り申すほどに、十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる。

『更級日記』の冒頭部分は、右のように、作者が姉や継母の話から「物語」に心惹かれ、やつのことで京に上ることができるといふ書き出しになっている。「瓢」と「物語」、興味の対象は異なるものの、惹かれたものに一途に向かっていくという共通性が、皇女と作者との間に見出されるのである。

作者は、物語を求めて胸を躍らせながら京へ向かう道中で、自分と同じように何かに心奪われ、衝動に駆られてその元へ行く姫君の話の聞いた。この伝説は、作者の物語への憧れを強調し、物語世界を求めてこの旅が、この日記が進んでいく、ということをも物語っている。

(三) 富士川伝説

「富士川伝説」は、駿河国の富士川にて、作者一行がその土地の人から聞いた話である。伝説の内容は以下のようなものである。

国の人が出かけた際に、川に黄色い反故が流れてきた。それには、来年の国司の任命が除目のように記されており、駿河国も、一人が書き添えられ二名の名がある。すると翌年、名が記された人が国司に任命されたが、その人は三か月で亡くなり、後任の国司は、書き添えられていた人物であった。そのような不思議なことがあり、来年の司召のことなどは、今年この富士山に、多くの神々が集まって任命なさるようだとわかった。

「国司予告説話」とも呼ばれるこの説話が作者によって執筆された所以は、作者の置かれた状況が深く関係していると捉えてよいだろう。作者の父菅原孝標は、上総や常陸などの受領階級止まりであった⁽¹³⁾。父の上総国での任期が終わり、京へ戻る道でこのような伝説を聞いたのだから、現実的な関心事だったのであろう。日記中にも後に、父の任官を期待するも、そのあてが外れ嘆いている様子の記述や、父がやっと常陸の国司になったという記述がみられる。作者がこれから、今後の人生を描いていくにあたり、この話を通して、これからも父の身分が安定せずに常に気にかけてなければならぬこと、定められた運命には抗えないことなどを暗示しているのかもしれない。

これらのような伝説は、他の地でも聞いていると推測される。作者が晩年に日記を執筆する上で、この三つの伝説が記事として選ばれた理由には、伝説の内容と、作者の人生とが深く関わって

いよう。上洛の記は『更級日記』の前半部に位置しており、読者からすれば、作者孝標女の一生を辿る上での、始まりの部分となる。三つの伝説はどれも、作者自身に重ねた内容とも読むことができる。三つの伝説の記述を、日記の初めの場面に織り込むことにより、作者が人生の軌跡を執筆していく上で、自身の人生の出来事を単に順に回想するというよりも、物語という理想を求め、自身の運命と重ね合わせながら回想していくことを提示しているのではないだろうか。

二 作品中に描かれる夢

『更級日記』中には十一の夢の記述があり、【表】で示したように、(2)京での生活(4)から(5)晩年(6)の場面まで広くみられる。

古代の人々にとつての「夢」は、現代人の考える「夢」とは異なる。夢の中に神仏のお告げを読み取る、夢で吉凶や運命を占うなど、当時の人々にとつては「確かな経験の一つ」として捉えられていた⁽¹⁴⁾。

また、文学作品、特に物語文学においては、夢は物語の展開を握る重要な鍵の一つとして用いられている。例えば、『源氏物語』明石巻で描かれる夢の梗概は以下の通りである。

須磨巻で、謀反の嫌疑を受けて官位を剝奪された源氏は、流罪を恐れて自ら須磨への退去を決めた。そこで暴風雨に襲われ、住吉大明神の御加護を祈念する。雨風が弱まってきた頃、疲れてうとうととしてしまった源氏の夢の中に亡き父桐壺院が現れ、「住吉の神の導きたまふまに、はや舟出してこの浦

を去りね」と仰る。すると翌朝、夢告通り助けが来た。それは明石入道であり、彼もまた夢告に従って、源氏を助けに来たと云う。

このように、夢の描写によってその後の展開や登場人物の運命が変わるほど、夢が重要視されていたことがわかる。

『更級日記』中に描かれる十一の夢を、内容によって、⑦忠告の夢、⑧将来を占う夢、⑨吉夢、⑩阿弥陀仏来迎の夢、の四つに分類し、適宜取り上げる。

⑦忠告の夢

〈夢①〉「法華経五の巻をとく習へ」と諭される夢

夢にいと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻をとく習へ」といふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず。

〈夢②〉「天照御神を念じませ」と諭される夢

夢に見ゆるやう、「このごろ皇太后宮の一品の宮の御料に、六角堂に遣水をなむつくる」といふ人あるを、「そはいかに」と問へば、「天照御神を念じませ」といふと見て、人にも語らず、なにも思はでやみぬる、いといふかひなし。

〈夢④〉清水寺参籠での夢

うちまどろみ入りたるに、御帳のかたの犬防ぎのうちに、青き織物の衣を着て、錦を頭にもかつき、足にもはいたる僧の、別当とおほしきが寄り来て、「行くさきのあはれならむも知らず、さもよしなし事をのみ」と、うちむつかりて、御帳のうちに入りぬと見ても、うちおどろきても、かくなむ見えつるとも語らず、心にも思ひとどめでまかぬ。

これらは、〔②京での生活〕の場面、物語のことで頭がいつぱいであった頃の作者が見た夢である。忠告されるような夢を見るも、そのお告げには従わず、執筆時にそのことを後悔している様子である。作者は物語にのめり込みながらも、信仰心をたなげればと、頭のどこかではわかっていたのかもしれない。信仰に身が入らずに物語や空想にばかりのめりこんでいたことを、それを忠告するような夢の啓示の記述を入れ込むことによって、強調している。

⑧将来を占う夢

〔②京での生活〕の場面で作者の母は、僧を初瀬に代参させ、娘の将来を占うように命じた。以下は、僧がその際に見た夢である。

〈夢⑤〉僧の代参の夢

この僧帰りにて、「中略」寝たりしかば、御帳の方より、いみじうけだかう清げにおはする女の、うるはしくさうぞきたまへるが、奉りし鏡をひきさげて、『この鏡には、文や添ひたりし』と問ひたまへば、かしこまりて、『文もさぶらはざりき。この鏡をなむ奉れとはべりし』と答へたてまつれば、『あやしかりけることかな。文添ふべきものを』とて、『この鏡を、こなたにうつれる影を見よ。これ見ればあはれに悲しきぞ』とて、さめざめと泣きたまふを見れば、臥しまるび泣き嘆きたる影うつれり。『この影を見れば、いみじう悲しなこれ見よ』とて、いまかたつ方にうつれる影を見せたまへば、御簾ども青やかに、几帳おし出でたる下より、いろいろの衣こぼれ出で、梅桜咲きたるに、鶯、木づたひ鳴きたるを見せ

て、『これを見るはうれしな』とのたまふとなむ見えし」と語るなり。いかに見えけるぞとだに耳もとどめず。

僧の話では、作者の将来は嘆き悲しむ面と喜ばしい面とがある、と占われたことになる。作者は、当時はこの夢を気にしなかつたと記しているものの、作品の終末部分でこの夢のことに再び触れる。〔⑤晩年〕の場面、夫の死の記事の後、「初瀬に鏡奉りしに、臥しまろび泣きたる影の見えけむは、これにこそはありけれ。うれしげなりけむ影は、来しかたもなかりき。今ゆく末は、あべいやうもなし。」「ただ悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心憂し。」という記述がある。夫が亡くなり悲しみに暮れる作者は、〔夢⑤〕について言及し、占われた悲しんでいる方の面は夫の死であつた、と確信しているようである。このような記述から、作者の中には、この夢で占われた将来の喜ばしい面への期待があつたということ、作者にとつて、夫の存在も重要であつたことが読み取れる。

⑦吉夢

〈夢⑥〉前世の夢

夢に見るやう、清水の礼堂にゐたれば、別当とおぼしき人出で来て、「そこは前の生に、この御寺の僧にてなむありし。

仏師にて、仏をいと多く造りたてまつりし功德によりて、ありし素姓まさりて人と生まれたるなり。この御堂の東におはする丈六の仏は、そのの造りたりしなり。箔をおしさして亡くなりしぞ」と。「あないみじ。さは、あれに箔おしたてまつらむ」といへば、「亡くなりししかば、こと人箔おしたてまつりて、こと人供養もしてし」と見てのち、清水にねむ

ごろに参りつかうまつらましかば、前の世にその御寺に仏念じ申しけむ力に、おのづからようもやあらまし。いといふかひなく、詣でつかうまつることもなくてやみにき。

〔③宮仕え〕の場面で、祐子内親王家に出仕するようになった作者が見たとされる夢である。今関敏子氏は、この夢を境に、作者の夢への態度が否定的なものから肯定的なものへと移つてゐることを指摘している¹⁵⁾。作者にとつてこの時期は、三十二歳で宮仕えを始めるもあまりなじめない状況で見た吉夢であり、この夢の記述以降、結婚の記事が続く。今までの夢と異なり良い内容のこの夢を、人生の中で大きな出来事の記事の前に置くことにより、作者の今後の人生や考え方に変化があることを示唆していると考へる。

〈夢⑦〉石山寺参詣での夢

おこなひさしてうちまどろみたる夢に、「中堂より麝香賜はりぬ。とくかしこへつげよ」といふ人あるに、うちおどろきたれば、夢なりけりと思ふに、よきことならむかしと思ひて、おこなひ明かす。

〈夢⑧〉山辺の寺で見た夢

終すこし読みたてまつりて、うちやすみたる夢に、いみじくやむごとく清らかなる女のおはするに参りたれば、風いみじう吹く。見つけて、うち笑みて、「何しにおはしつるぞ」と問ひたまへば、「いかでかは参らざらむ」と申せば、「そこは内裏にこそあらむとすれ。博士の命婦をこそよくかたらはめ」とのたまふと思ひて、うれしく頼もしくして、いよいよ念じたてまつりて、

〈夢⑨〉長谷寺参籠での夢

三日さぶらひて、暁まかむとてうちねぶりたる夜さり御堂の方より「すは、稲荷より賜はるしるしの杉よ」とて、物を投げ出づるやうにするに、うちおどろきたれば、夢なりけり。

〈夢⑦〉は、若い頃に浮ついた心で過ごしたことを反省した作者が、後世の往生を念じようと、物語に励むようになる〔④物語〕の場面で記される夢である。〈夢⑨〉については、作者がこの夢を見た後、どのような行動をとったのかは記されていないが、〔⑤晩年〕⑤悔恨の場面で、再びこの夢について記される（後述の〈物語⑬〉を参照）。その述懐部分によると、作者はこの夢を見た後に稲荷には詣でず、そのことを後悔しているようだ。上手くいかなかった原因を自身の信仰心の浅さに見出していることを、強調しているようである。

①阿弥陀仏来迎の夢

〈夢⑪〉阿弥陀仏来迎の夢

さすがに命は憂きにもたえず、長らふめれど、後の世も思ふにかなはずぞあらむかしとぞ、うしろめたきに、頼むことひとつぞありける。天喜三年十月十三日の夜の夢に、ゐたる所の家のつまの庭に、阿弥陀仏立ちたまへり。さだかには見えたまはず、霧ひとへ隔たれるやうに、透きて見えたまふを、せめて絶え間に見たてまつれば、蓮華の座の、土をあがりたる高さ三四尺、私の御たけ六尺ばかりにて、金色に光り輝きたまひて、御手かたつ方をばひろげたるやうに、いまかたつ方には印を作りたまひたるを、こと人の目には、見つけたてまつらず、われ一人見たてまつるに、さすがにいみじくけお

そろしければ、簾のもと近く寄りてもえ見たてまつらねば、仏、「さは、このたびはかへりて、後に迎へに来む」とのたまふ声、わが耳ひとつに聞こえて、人はえ聞きつけずと見るに、うちおどろきたれば、十四日なり。この夢ばかりぞ後の頼みとしける。

作品の終末近く、〔⑤晩年〕の夫の死の記事、人生を振り返つての述懐の後に記される夢である。唯一日付が記されているのだが、これは夫の死の約三年前の日付であり、記述が前後していることがわかる。そのため、意図的にこの位置にこの夢の記述が挿入されていると考えられる。

〈夢⑦〉からの日記後半に記される夢の記述では、作者が夢を頼みにしている様子がみられた。しかし実際には、先に取り上げた述懐からもわかるように、そのような願望は叶っていない。そのため、来世への唯一の頼みとして、この夢を記したと言える。

これら夢の記述は、直接的には語られないものも含め、作者の理想や抱える願望、人生における各時点での今後の出来事の示唆、考え方や心の変化を提示するものとして配置されている。夢の記述によつてその当時の感情、様子が露呈され、その後の日記の展開に向かわせるような役割になっている。作者が自身の人生をどう捉えてきたかを、夢によつて間接的に浮かび上がらせている。

三 物語からの影響

(一) 物語への没頭

作品中にみられる物語に関わる記述を、⑦物語に没頭する記述、

①『源氏物語』にまつわる記述、②物語に没頭した過去への述懐、の三つに分類し、適宜取り上げる（傍線部は執筆による）。

⑦物語に没頭する記述

〈物語①〉 作品冒頭

あづま路の道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ればやと思ひつつ、（中略）「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、あるかぎり見せたまへ」と、身を捨てて額をつき祈り申すほどに、十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる。

〈物語②〉 京に着いてすぐに物語を求めめる作者

「物語もとめて見せよ、物語もとめて見せよ」と、母をせむれば、三条の宮に、親族なる人の、（中略）わざとめでたき冊子ども、硯の筥の蓋に入れておこせたり。うれしくいみじくて、夜昼これを見るよりうちはじめ、またまた見まほしきに、

〈物語③〉 悲痛な出来事と物語

乳母も、三月ついたちに亡くなりぬ。せむかたなく思ひ嘆くに、物語のゆかしさもおほえずなりぬ。（中略）また聞けば、侍従の大納言の御むすめ亡くなりたまひぬなり。（中略）母、物語などもとめて見せたまふに、げにおのづからなぐさみゆく。紫のゆかりを見て、つづきの見まほしくおほゆれど、人かたらひなどもえせず。たれもいまだ都なれぬほどにてえ見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしくおほゆるままに、

「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」と心のうちにいのる。（中略）をばなる人の田舎より上りたる所にわたいたれば、（中略）「何をかたてまつらむ。まめまめしき物は、まさなかりなむ。ゆかしくしたまふなる物をたてまつらむ」とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将、とほぎみ、せり河、しさら、あさうづなどいふ物語ども、一ふくろとり入れて、得てかへる心地のうれしさぞいみじきや。

はしるはしるわづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちにうち臥して引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、さらにおほえ浮かぶを、いみじきことに思ふに、

〈物語④〉 夢告を無視して物語に耽溺する日々

物語のことをのみ心にしめて、

〈物語⑤〉 物語耽読

物語のことを、昼は日ぐらし思ひつづけ、夜も目のさめたるかぎり、これをのみ心にかけたるに、夢に見ゆるやう、

〈物語⑥〉 物語耽読

夜ふくるまで物語をよみて起きあつたれば、

三人称視点で書かれた〈物語①〉は、作者が物語を求めて京へ向かう書き出しとなつている。京に着いてからも物語を読みたいと切望し、やつの思いで手にしてからは、四六時中物語に夢中になる作者の様子が描かれる。

①『源氏物語』にまつわる記述

〈物語①〉 作品冒頭

姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏の
あるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさ
まされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。

〈物語③〉 悲痛な出来事と物語（前掲）

「紫のゆかり」、「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せ
たまへ」、「源氏の五十余巻」、「心も得ず心もなく思ふ源氏」
〈物語④〉 夢告を無視して物語に耽溺する日々
われはこのごろわろきぞかし、さかりにならば、かたちもか
ぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ。光の源氏の夕顔、
宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、
まづいとほかなくあさまし。

〈物語⑨〉 真面目に物語をせず空想に耽る

このごろの世の人は十七八よりこそ経よみ、おこなひもすれ
さること思ひかけられず。からうじて思ひよることは、「い
みじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などの
やうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、
浮舟の女君のやうに、山里にかくし据ゑられて、花、紅葉、
月、雪をながめて、いと心ほそげにて、めでたからむ御文な
どを、時々待ち見などこそせせめ」とばかり思ひつづけ、あら
ましごとにもおぼえけり。

〈物語⑪〉 結婚後

光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは。薫大将の宇
治にかくし据ゑたまふべきもなき世なり。あなものをぐるほし。

〈物語⑫〉 長谷寺に向かう道中、宇治にて

つくづくと見るに、紫の物語に宇治の宮のむすめどものこと
あるを、いかなる所なれば、そこにしも住ませたるならむと
ゆかしく思ひし所ぞかし。げにをかき所かなと思ひつつ、
からうじて渡りて、殿の御領所の宇治殿を入りて見るにも、
浮舟の女君の、かかる所にやありけむなど、まづ思ひ出でら
る。

〈物語④〉や〈物語⑨〉では、光源氏のような人に憧れ、夕顔
や浮舟のような人物になりたい、という作者の憧憬の対象が示さ
れ、〈物語⑪〉結婚後の記述では、その理想が叶わず現実を思い
知った作者の心情が吐露されている。〈物語⑫〉では宇治で浮舟
のことが思い出されるなど、特に浮舟への言及は一番多い。この
点については後述する。

⑬ 物語に没頭した過去への述懐

〈物語⑪〉 結婚後

その後はなにとなくまぎらはしきに、物語のこともうちたえ
忘られて、ものまめやかなるさまに、心もなりはててぞ、な
どて、多くの年月を、いたづらにて臥し起きしに、おこなひ
をも物語でもせざりけむ。このあらましごとども、思ひ
しことどもは、この世にあんべかりけることどもなりや。

受領階級の橘俊通と結婚した後のこの記述を境に、物語を耽読
するような描写はみられなくなり、物語や信仰などに勤しむ記述
が多くなつていく。宮仕え、結婚を経験した作者が、今まで理想
として描いてきたものが言葉通りの理想でしかなかったことを実
感し、現実を見据えるようになっていったことが読み取れる。

〈物語⑬〉 日記巻末部の述懐

昔より、よしなき物語、歌のことをのみ心にしめて、夜昼思ひて、おこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。初瀬にて前のたび、「稲荷より賜ふしるしの杉よ」とて投げ出でられしを、出でしまに、稲荷に詣でたらましかば、かからずやあらまし。年ごろ「天照御神を念じたてまつれ」と見ゆる夢は、人の御乳母して、内裏わたりにあり、みかど、後の御かげにかくるべきさまをのみ、夢ときも合はせしかども、そのことは一つかなはでやみぬ。ただ悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心憂し。かうのみ心に物のかなふ方なうてやみぬる人なれば、功德もつからずなどしてただよふ。

夫の死の記事に連なつて、作品末尾部分に位置する述懐である。昔から物語や歌に夢中にならずに勤行に励んでいれば、このような「夢の世」を見ずに済んだのに、という人生を振り返つての悔恨が綴られ、(夢⑨)や(夢②)、(夢⑤)が回想される。

「よしなき物語、歌のことをのみ心にしめて」という部分からは、今まで自分が物語や歌に熱中してきたことを非常に後悔しているかのようにもみえ、この日記の主題を物語からの宗教心のあらわれ、物語に熱中してきた自身への批判、とみるような研究も少なくはない。しかしそれならば、今まで辿ってきた記述のように、これほどまで作品全体を通して「物語」と共に筆を進めなかつただろうし、そもそも、物語を求めて京へ向かうという書き出しもしないはずである。

(二) 浮舟への憧憬

(物語④、⑨、⑪、⑫)では、浮舟についての言及がある(物

語⑪)の、薰大将がかくまつた女は浮舟である)。浮舟は、『源氏物語』の中で、二人の貴公子からの愛情に板挟みになり、入水自殺を試みるも果たすことができず、後に出家する女性として描かれる。

『更級日記』の作者が浮舟に惹かれた理由として主に指摘されているのは、以下の三点である。一つ目は、浮舟が悲劇のヒロインであるゆえ、物語に憧れ、「竹芝伝説」のような運命的な展開に惹かれる作者の関心を引いたのではないかということである。二つ目は、作者が、浮舟の出自や家庭環境に親近感を覚えたのではないかということである。三つ目は、作者が浮舟の宗教的意識から影響を受けているのではないかということである。大倉比呂志氏は、(夢⑪)に注目し、浮舟の阿弥陀仏信仰と重ねて「孝標女の意識には浮舟のことが想起された」と語られているに違いない。」と述べている。『源氏物語』では、出家を遂げた浮舟が、薰がまだ自分のことを好いていると聞いて心が揺れ動き、ひたすら阿弥陀仏を念じてやり過ぐす場面がある。

月日の過ぎゆくままに、昔のことのかく思ひ忘れぬも、今は何にすべきことぞと心憂ければ、阿弥陀仏に思ひ紛らはして、いとどものも言はであたり。

(『源氏物語』夢浮橋)

夫の死後どうしようもなくなった作者は、浮舟がそうしたように、阿弥陀仏にすがつてやり過ぐしていたのかもしれない。

作者にとって「物語」は、常に人生と隣り合わせにあった。物語から得られる楽しさ、喜び、夢を見させてくれるという輝かしい面だけでなく、自身の人生と重ねて考えると、時にそれが不都

合ともなり得、物語に理想を求め続けていたことを悔恨するような叙述もみられる。しかし、作者は結局、この日記を書いている時点で文学的なものを捨て切れていない。人生が終わりに差し掛かっているのを感じとり、自身の人生を見つめ直した際に、最後まで物語と共に歩んだ人生であったこと、そしてそれは全て『源氏物語』との、浮舟との出会いから始まっていたということを認識したのだろう。

おわりに

三つの観点の記述の位置と内容、そして日記から読み取れる作者の人生とを踏まえると、以下のように考えられる。「伝説の記述」が作品の初めの方に記されることは重要である。作者の、この日記によって自身の人生を書き残すこと、物語を求めて向かうこと、自身の運命や現実に向き合わなければならないことと響き合う。「物語」という理想を求めて自身の運命と重ね合わせながら執筆していくという提示が、ここに読み取れる。そして、作者の人生において重要な時点に、その時の作者の意識が向いていたものや、その後の人生の展開、心情の変化などが、「夢の記述」を通して、物語文学における夢のように、意図的に配置されている。「物語に関わる記述」が作品全体を通して記されることにより、作者が人生を物語との関わりの上で捉え直そうとしていること、抱いた理想も、それゆえの幻滅も物語によるものであり、それは『源氏物語』との出会いから始まっていたと認識していることが読み取れる。

作者は、物語に憧れていることなどから夢想的な性格だと捉えられがちだが、むしろ、自身の人生にしっかりと向き合っている、現実的な性格であると言える。それは、物語に夢中になっていた頃について、それを咎めるような夢の啓示や反省する記述が織り込まれていること、中期に物語に励んだことが記され、阿弥陀仏来迎の夢や、身分の高いヒロインではなく浮舟への憧憬、仏道への視点がみられることから浮かび上がる。当時の仏教社会で「物語」が狂言綺語として憚られていたことを、作者は意識していたのか、物語を完全肯定するような書き方はしていない。しかしそれでも、憧れた物語や、物語と関わってきた自身の過去を否定することはできなかったのではないだろうか。

作者はこの日記で、「自分の人生は物語から始まり、物語と共に生きた」ことを書こうとしたのではないか。この『更級日記』という作品は、平安期を生きた受領の娘である菅原孝標女が、物語に生かされた自身の人生を、物語との関わりから捉え、物語的要素を織り込みながら書いた日記文学なのである。

※本稿で引用した本文の出典は以下の通りである。

新編日本古典文学全集『更級日記』（小学館、一九九四）、同『源氏物語』（一九九八）

【注】

(1) 池田亀鑑『宮廷女流日記文学』（至文堂、一九二七年）

(2) 家永三郎「更級日記を通して見たる古代末期の廻心」（『上代仏教思想史』畝傍書房、一九四二年）

(3) 野村精一『源氏物語の創造』(桜楓社、一九六九年)、宮崎

莊平『平安女流日記文学の研究』(笠間書院、一九七二)一九七七年)、杉谷寿郎『更級日記の構造』(『語文』三十七号、一九七二年三月)などで論じられている。

(4) 津本信博『更級日記』の成立』(石原昭平ほか編『女流日記文学講座第四卷』勉誠社、一九九〇年)では、「様々な苦痛を乗り越えたところに到達した現時点から、少女期から発する自己史を愛しむかのように愛惜の念で今一度人生を紡ぎ直す行為」であると説かれ、原岡文子『更級日記』の物語と人生』(前掲『女流日記文学講座第四卷』)では、「自らの人生を顧み、四十年の来し方を物語と宗教への関心のあわい、その戯れの中に見据えようとした」ものとして説かれている。

(5) 新編日本古典文学全集『更級日記』(小学館、一九九四年)における、犬養廉氏による章段分けである。

(6) 津本信博『更級日記の研究』(早稲田大学出版部、一九八二年)

(7) 工藤進思郎『更級日記』の竹芝伝説をめぐって——作者の東国故郷意識との関連を中心に——』(『岡大國文論稿』一号、一九七三年三月)、益田勝実『説話文学と絵巻』(三一書房、一九八六年)

(8) 津本信博『更級日記作者 菅原孝標女』(新典社、一九八六年)では、『大和物語』百五十五段との類似性が指摘されている。大納言の美しい姫君を見初めた内舎人が、姫君を連れ出して陸奥の国へ逃げる話型の話であるが、自身の面変わりや嘆いて姫君は死んでしまふ。男も、姫君の亡骸の傍で嘆き死ぬと

いう、悲しい結末である。

(9) 多田一臣『菅原孝標女更級日記の(竹芝伝説中の帝の姫君)——憧憬への同化』(『国文学解釈と教材の研究』二十七卷十三号、一九八二年九月)では、『伊勢物語』六段、十二段について言及されている。どちらも、通い続けた女、人の娘を盗み逃げる話になっており、六段はその女が鬼に食われてしまふという結末、十二段は、逃げる道中で男が国守に捕まるとい、暗い結末となっている。

(10) 小谷野純『更級日記への視界』(新典社、二〇一〇年)

(11) 西木忠一『三つの伝説…更級日記』上洛の記』(『樟蔭国文学』四十四卷、二〇〇七年三月)

(12) 須田哲夫『更級日記』作者の人間像について——日記に記載する伝説を中心に』(『天東文化大学紀要』一輯(第一分冊)、一九六三年三月)

(13) 菅原孝標は、菅公五世の嫡孫である。上総や常陸などの受領階級止まりであり、代々大学頭や文章博士を担ってきた菅原家の当主としては、凡庸な生涯であったと言ってよい。

(14) 西郷信綱『古代人と夢』(平凡社、一九七二年)

(15) 今関敏子『更級日記』の作品空間と夢——虚構と存在把握——』(伊藤守幸・和田律子・久下裕利編『更級日記の新研究——孝標女の世界を考える』新典社、二〇〇四年)

(16) 前掲注(2) 家永氏同論文、関根慶子『更級日記における阿弥陀仏の夢をめぐって』(同著『平安文学 人と作品とところどころ』風間書房、一九八八年)

(17) 原岡文子『更級日記』の物語と人生』(前掲『女流日記文

学講座第四卷」などに詳しい。

(18) 前掲注(6) 津本氏同書、野口元大「更級日記と源氏物語・菅原孝標女の作家的資質」(『上智大学国文学科紀要』二号、一九八五年一月)などで説かれている。

(19) 志津田兼三「更級日記考——なぜに夕顔・浮舟か、そのよしなき物語・歌のを中心」(『国語と国文学』五十八巻十号、一九八一年十月)、西田禎元『更級日記研究序説』(教育出版センター、一九八二年)、津本信博『更級日記』の成立」(前掲注(4))などで論じられている。

(20) 大倉比呂志「更級日記における浮舟の意味・再論」(木村正中編『論集 日記文学』笠間書院、一九九一年)

(たむら・ゆきの 千葉大学文学部人文学科日本・ユーラシア文化コース二〇二五年卒業)